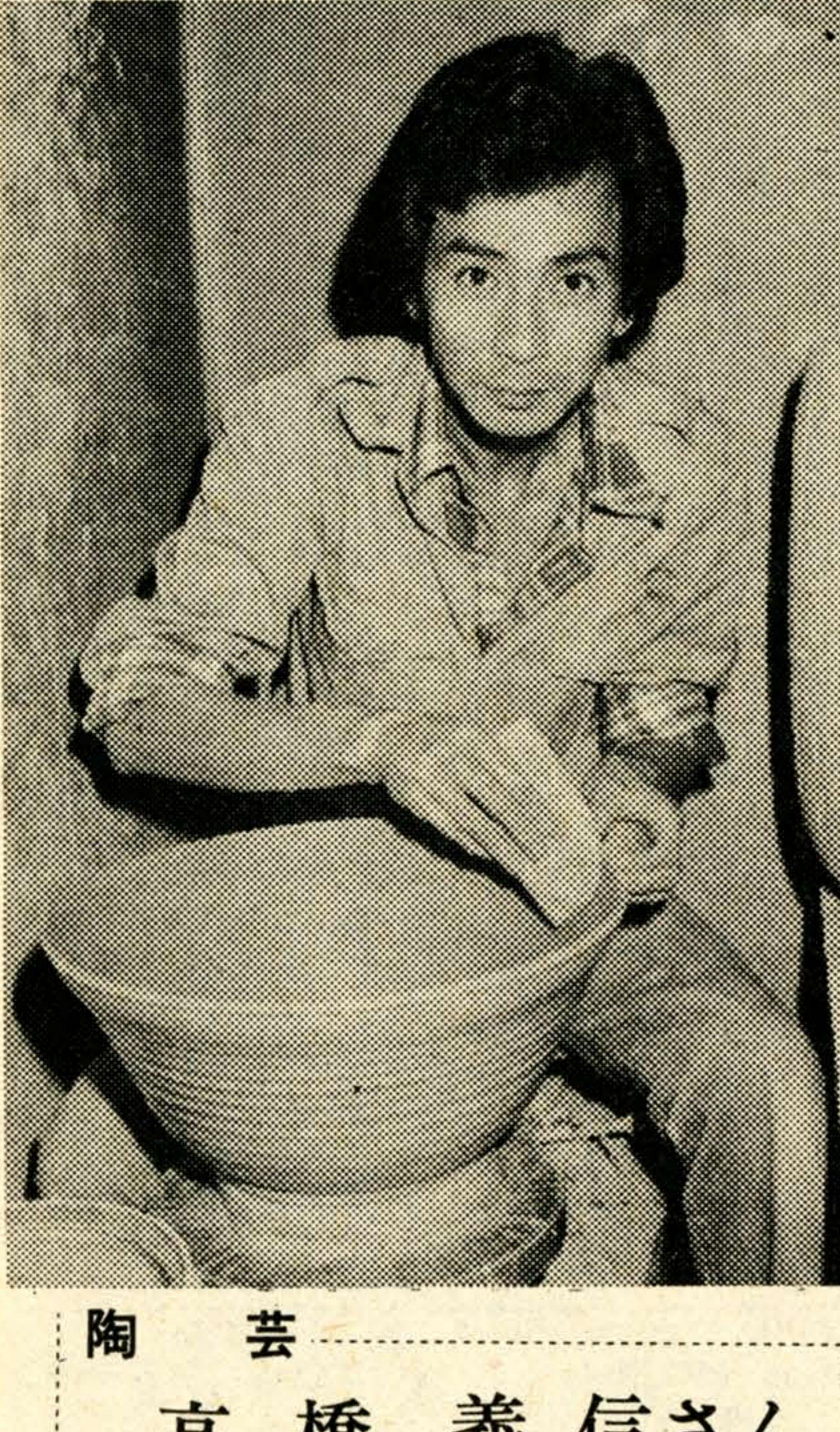


受賞者 の プラスカル

活動に情熱を傾ける花柳徳保さん、陶芸部門で独自の釧路焼を創造し新しい分野に挑戦している橋義信さんの二人。二十四日の授賞式を前にその実績とプロフィルを紹介しよう。



同

ひき入り、年賀状

感じさせる作品をつくで覚えた。苦心して語る。土が命の陶芸の二、三百個の茶器へ帰りたいという。つしだけですべて

で覚えた。苦心してつくつた最初の二、三百個の茶器は師匠が一べきに、焼き物の命とされてしまい歩き回った。量土が命の陶芸のたいといふ。 せる作品をつく  
せんの風土に根ざす  
鉿路の風土に根ざす

こした作品をテ  
ものを市民の生活と密着させたい  
といふ。『これからも釧路の風土  
最初は電気炉を  
に息づいた陶器を制作し続けたい  
呪である土さが

の釧路焼を創造  
市民生活に密着させた

自分の作品を制作するかたわら  
陶芸教室も開いて四十人の弟子に  
釧路焼を教え、陶芸の普及にもあ  
たつてゐる。「焼くものは茶器に

現出する。

多少ない登竜を使つて  
云の世界を開きつつあ  
を完成させ、今年十月  
を聞き、開き、釧路市民を  
陶器皿に絵をかいて  
高校時代は油絵を描  
に話したのがきっかけ  
で知られる井手金作  
られた自然美の世界へ  
した。弟子入りして  
「陶芸美の原点に帰、  
ただ座つて師匠の作

見たいと教師  
けで、唐津焼  
中里茂右衛門氏に師事  
氏に弟子入りをはなれて三年後に独  
ニカ月ほどは世界を築こうと夢を抱  
品づくりを目  
た。

の世界を広  
本でも数少ない登窯を完成させた  
焼の十四代  
火入れは一年に三回で、一日半を  
した。釧路  
かけて窯に作品を入れ、一昼夜五  
自の陶芸の  
分おきにマキ（米マツ）をたき続  
いて帰郷し  
ける。重労働でもあるが、完成し  
た作品は自然に灰色がはいり、灰

『唐津焼を学んだ。深さを知った』とい

う。

こそが大切

三七

千万円

をかけて日

江町三